平成18年２月28日発行
発行：学校法人皇學館
編集：法人本部総務課
TEL0596・22・6308
E-mail : soumu@kogakkan-u.ac.jp

皇學館学園報 第7号

■伊勢学舎
［法人本部・大学院・専攻科・文学部］
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704番地
TEL0596・22・0201㈹　FAX0596・27・1704
■名張学舎
［大学院・社会福祉学部］
〒518-0498 三重県名張市春日丘７番町１番地
TEL0595・61・3351㈹　FAX0595・61・3350
●インターネットホームページ
http://www.kogakkan-u.ac.jp

櫻井勝之進常任顧問の葬儀しめやかに

合同葬に七百余名が参列

◆県営サンアリーナ

神社界や宗教界、教育界などから大勢の人々が駆けつけ、故人に最後の別れを告げた。

本学園並びに神社界、宗教界の発展に尽力し、平成十七年十二月二十五日に帰幽された櫻井勝之進常任顧問（享年九十六歳）の本葬が去る一月二十六日、伊勢市の三重県営サンアリーナでしめやかに執り行われた。学校法人皇學館・多賀大社・滋賀県神社庁による合同葬は、葬儀委員長として理事長 上杉千郷、副委員長として多賀大社宮司・滋賀県神社庁長 中野幸彦氏、滋賀県神社庁副庁長・日牟禮八幡宮宮司 岳尋幸氏、葬儀委員として皇學館大学学長 伴五十嗣郎、館友会会長・熱田神宮宮司 小串和夫氏のもと斎行され、本学関係者をはじめ各界から故人とゆかりの深かった七百余名が参列し、最後の別れを惜しんだ。

（上）　謝辞を述べられる上杉葬儀委員長と喪主・櫻井治男氏。
（左上）各界の代表者たちによる弔辞では、故人との思い出、偉大な御業績を回想しながらその死を悼んだ。
（左）　葬儀副委員長・葬儀委員の玉串拝礼。
（下）　壇上の喪主、葬儀副委員長・葬儀委員並びに御親族。

本学校法人皇學館常任顧問並びに多賀大社名誉宮司、滋賀県神社庁名誉庁長であらせられた櫻井勝之進氏が亡くなったとの知らせに、関係者は深い悲しみに包まれた。櫻井氏と親交のあった人々からは「先生のご功績は語り尽くせないほど。更なるお力添えを賜りたかった」などと人柄を懐かしむとともに、逝去を惜しむ声が相次いだ。

この日葬儀委員長を務めた上杉千郷本学理事長は告別の辞のなかで「将に『巨星墜つ』、掛け替えのない先達を失ったという無念の想いに暮れました」とその死を悼み、「先生が示された道に生き、学問に生きられた人生に対する姿勢と精神とを私達の人生の指針として行くことこそ、先生に対する御恩返し」と述べた（三頁に全文別掲）。

続いて、神社本庁統理・久邇邦昭氏、神宮大宮司・北白川道久氏、多賀大社責任役員・奥野文雄氏、滋賀県神社庁副庁長・岳尋幸氏が弔辞。

最後に、上杉葬儀委員長と遺族を代表し喪主である櫻井治男氏（本学教授・社会福祉学部長）が謝辞を述べ、各界代表者、参列者全員が玉串を捧げ拝礼し葬儀は終了した。

神社界、宗教界、教育界において幅広くご活躍

故櫻井勝之進氏は明治四十二年島根県那賀郡今福村（現・浜田市）生まれ。神宮皇學館本科第一部卒業後、国幣小社津島神社を振り出しに真清田神社、多賀神社、菊池神社、神宮、多賀大社を最後に神社界において七十有余年に及び奉職。一方で、本法人の皇學館大学の再興、そして運営に尽くし、建学の精神を発展させる社会福祉学部の設置など学園の発展に大きく貢献された。

書に「蒼山」、俳句に「蒼生子」の号を持たれ、その墨蹟は神社界の三筆と称せられるほど。学問への情熱も深く、七十九歳にして学術博士号（芦屋大学）を取得。生涯の著述は十冊余に及び、昨年八月に発刊の『神道を学びなおす』は最後の著作となった。

多岐にわたる長年のご活躍が認められ、平成二年には神職として最高の栄誉である長老の称号が、平成七年には勲三等瑞宝章を授与された。

厳粛のうちに執り行われた密葬

祖霊社における密葬　祭壇

親族と関係者らによる密葬は前宵祭が十二月二十七日、告別式が翌二十八日、厳寒の中、伊勢市岡本の祖霊社においてしめやかに執り行われ、あわせて六百名近くの参列があった。

告別式では、ありし日の穏やかな表情が浮かぶ遺影が置かれ、神社本庁副総長・石清水八幡宮宮司・田中恆清氏、本学校法人皇學館顧問（前理事長）・岡田重精氏、本学神道研究所教授・牟禮仁氏らがそれぞれ故人の思い出とともに弔辞を述べ、喪主・櫻井治男氏の挨拶の後、参列者の玉串奉奠の列が続いた。

櫻井勝之進大人命本葬祭詞

斎主　多賀大社宮司　滋賀県神社庁長　中野幸彦

常磐堅磐尓緑奈須朝熊岳乎背尓負比氐二見浦乃浪波遠久尓見晴加須此乃大室乎厳乃齋場登定米氐坐世奉留元乃学校法人皇學館常任顧問多賀大社名誉宮司滋賀県神社庁名誉庁長尓志氐神社本庁長老神社本庁顧問奈留勲三等学術博士櫻井勝之進大人命乃御霊乃御前尓多賀大社宮司滋賀県神社庁長中野幸彦悲志美乎堪辺尓堪辺都慎美敬比母白左久憐礼汝命夜現世尓有氐波限利無伎功勲乎挙介奴留波関係布萬人汎久知留處奈利今志母九十路余六歳乃授加利寿命乎全伎志神去利給布人乃命尓限利有留波世乃常登波覚由礼杼母悼美尓悼美悲志美尓悲志登涙湧留轉轉思慕乃念去利夜良受汝命乃一世乎心痛米都顧美須礼婆明治四十二年神無月二十八日島根県那賀郡今福村大字久佐奈留村社八幡宮社掌櫻井勝茂大人櫻井ヌイ刀自乃長男登志氐現世尓生出給布幼久志氐御性最賢志久小学校尓上利氐筆乎執利氐波其乃墨蹟尋常成良受選婆礼氐御前揮毫乎為須程尓神童登呼婆留其乃道波名尓志負布名筆家乃誉髙久蒼山登號志生涯乎貫久波知留人曽知留處奈利或波俳句乎嗜麻礼蒼生子登印志若久志氐時鳥乃同人登道尓励美其乃名母広久知良礼介利事有毎尓一句乎知己尓捧波介氐喜毟乎分知合比温伎心根乎五七五尓託志氐謠比挙具礼留波誼有留人達広久知留處奈利平成十六年霜月由久利無久母入院加療乎了辺小康乎得退院其乃事乎喜毟氐葉書尓認米可多志希奈寿命賜波利冬日燦蒼生子登有利大人命乃晴礼晴礼志心映辺寄世良留功績此処尓述倍挙具留母数多尓志氐参集布諸人尓波手許乎繙伎氐覚由留程尓乞願白志伎去利乍良昭和六年神宮皇學館乃学毟了辺今日尓至留迄母校愛醒米夜良受生涯乎伊勢乃倉田山松乃緑登若草萌由留丘辺尓心乎捧介殊尓波戦後廃校乃憂目尓遭比氐依利再興乃志固久館友諸士登相計

斎主　祭詞奏上

利集比尓集比氐熱伎願比此処尓実利昭和三十七年四月再興開学式執行波留命乃時乃喜毟如何許利尓夜有良牟其乃熱伎心波滚留程尓平成二年理事長尓推留左夜時乃求米波此処尓曽有介留登相互扶助波福祉乃心皇国乃国史乃原点与利出受留登氐福祉学部創設乎発議須幾多乃艱難辛苦母有賀利志大学乃希望登名張市乃温加伎志賀入紐乃心一都尓結毟合比平成十年皇學館大学名張学舎乃竣工四月一日社会福祉学部社会福祉学科発足登波成利奴今志母茲尓文学部社会福祉学部二学部六学科登志氐大学運営波充実須命乃社会福祉乃必要性乎見透世留先見性尓今更尓驚伎都母今奇志久母櫻井家乃後嗣治夫伊其乃志尓報比奉良牟登社会福祉学部乃長登志氐発展充実尓尽世留波汝命夜心安良尓見守利給布事登波成里奴神隨乃勤波祭祀乃厳修一筋尓厳志久国幣小社津島神社国幣中社真清田神社官幣大社多賀神社別格官幣社菊池神社登歴任志昭和三十年神宮教導司登志氐神宮勤仕尓入利禰宜尓進美氐総務部長登志氐第六十回式年遷宮乎世尓汎久知良志免牟登心乎砕伎其乃重伎勤波斯界乃広久知留処奈利別氐母独自乃神宮学乎確固多留史料尓基伎氐学説乎展倍広米其乃研究著作乎広久世尓出志多留中尓神宮乃祖型登展開氐布論文波芦屋大学尓認良礼留処登奈利学術博士乃学位乎得金字塔建都事登波成利奴昭和五十年多賀大社尓再毟乃奉仕登成留夜神社波氐子地域乃心乃拠所登氐氏神登氐子乃絆乃大切奈利乎奉仕乃中心尓氐子崇敬者尓心乎配利昭和六十一年官幣社列格百年多賀講創設五百年記念事業登氐社務所増築乎始米多賀大社乃歴史乎大切尓保存須留諸建物乃保存整備尓心乎致須中尓滋賀県神社庁長尓推左礼更尓波神社本庁副総長昭和六十年全国神社界与利推氐神社本庁総長乃重伎任乎負比学識識見共尓秀出多留命乃面目躍如全国八萬神社乎束祢諸案件乃采配波目乎見張留許利尓志氐神社本庁新庁舎乃完成乎見留登共尓機構乃整備諸問題乎解決殊尓波思比母及婆左留天皇陛下崩御在良留事尓波国民斉志久悲志美乃中尓時乎措加奴速加尓志氐適格奈留対応波今尓志思辺婆苦悩如何許利登察須留尓余利有利平成二年三月五十七年間尓亘留長伎神前奉仕乎辞須事登成利多賀大社名誉宮司登成利奴此乃年神社本庁長老鳩杖乎池田厚子総裁与利賜波留神主最髙乃誉礼尓志氐此乃時齢八十一歳数数乃功績波恐礼多久母畏伎辺尓達志奴礼婆平成七年秋勲三等尓叙世良礼瑞宝章乎天皇陛下与利賜波留汝命耶生礼出伝志与利此乃日最良乃晴礼乃日尓夜有良牟天晴礼嬉志阿奈楽志登其日乃御姿今母瞼尓浮毟氐去利夜良奴思比返須母詮無伎事奈礼杼今志御前尓参来集布数多乃人人汝命乃謦咳尓接志氐波教辺乎乞比学毟励麻左礼勇気乎得将又諭左礼或波褒米良礼喜婆礼志数数波昨日今日乃如懐志久還良奴思出尽久留事無志去年乃師走尓入利氐御病尓伏志日赤山田病院尓入利氐母多賀大社平成乃大造営心尓懸介其乃進捗尋祢都春乎待知参拝乎楽志美登寝台加良白板尓認米良礼志賀御病俄尓変革利師走二十五日朝来伎有明乃月影隠留賀如久朝露乃日影無久消由留賀如久九十六才乎一世乃限利登神去利坐志氐伊邪那美大神乃領伎坐須黄泉国尓旅立知坐志奴阿奈悲志阿奈口惜志登言乃葉無介礼杼御前尓掲介在利志日乃御姿瞼尓焼伎都葬儀委員長尓学校法人皇學館理事長上杉千郷賀仕辺奉利多賀大社滋賀県神社庁共尓計利氐合同葬登氐仕辺奉留尓依氐御前尓海川山野乃御贄物乎奉利交交尓在利志日乃汝命登共尓在須賀如久玉串乃執執尓涙乃露乎掛介添辺氐永遠乃別礼登拝美奉留状乎諾比聞食志給比黄泉路遥介久喪無久事無久神昇利坐左志米給比櫻井乃家乃永遠乃守護利波申須母更奈利皇學館乎始米広久神社界乃行末乎母長久久志久子孫乃八十続尓至留迄教辺導伎給辺登悲志尓言乃葉整波受打都忍手母力萎辺由留乎偲毟偲毟氐慎美敬比母白須

玉串を奉奠して拝礼する参列の方々。

告別の辞

葬儀委員長　学校法人皇學館理事長　上杉千郷

今は亡き学校法人皇學館常任顧問、多賀大社名誉宮司、滋賀県神社庁名誉庁長　櫻井勝之進大人命の御霊の御前に謹んで告別の辞を申し上げます。

厳寒の続く日々、遂にお別れの時を迎えました。去る十二月二十五日朝、先生の訃報に出張先の沖縄で接した私は、将に「巨星墜つ」、掛け替えのない先達を失ったという無念の想いに暮れました。急遽伊勢に帰り、拝した尊顔は、今にも目を開け、お言葉を賜われるものと錯覚するほどの安らかなお顔でした。

思い起こせば、先生との関係は私が神社本庁に勤務してから五十年を超えるもので、神社人また皇學館の先輩として時に厳しく、時に懇切にご指導をいただいて参りました。

明治四十二年生まれ、九十六歳におなりになるのに、とてもそんな年齢を感じさせず、常に矍鑠として、しかも頭脳明晰、かつ柔軟、瑞々しいお考えで、晩年に至るまで我々をご指導下さっておられました。

先生は島根県、現在の浜田市に鎮座の村社八幡宮の社家櫻井勝茂社掌の長男としてお生まれになり、神宮皇學館本科を昭和五年に第四十期生として卒業されました。前後

には、戦後の神社界をリードされた錚々たる方々がおられます。二期上には三浦重義多賀大社宮司、一期上には熱田神宮宮司・神社本庁総長、当法人理事長・総長を勤められた篠田康雄氏、また高松忠清元住吉大社宮司、一年後輩には庄本光政弥彦神社宮司を始めとする方々が綺羅星の如く並んでおられます。まさに館友神職が一時代を画した中枢にあり、活躍されました。

国幣小社津島神社を振り出しとする七十年余に及ぶ神社界、更に宗教界・教育界等でのご活躍は到底、限られた時間では述べることは出来ませんが、その一端に触れ、先生のご功績を讃えさせて戴きたいと思います。

先生の歩まれた道におけるご功績は、大きく三つの面から見ることが出来ると存じます。

一つは、人生を通じて一貫してご奉仕になられた神社界でのご功績です。何といっても先生にとり、神宮でのご奉仕が生涯の神職の道としての中核にありました。その中にあって昭和四十八年、第六十回神宮式年遷宮において、神社本庁に勤務していた私は報道部副部長を拝命しており、神宮の総務部長であった先生の指揮下でご奉仕させていただきましたが、あの遷御の夜における先生の凛とした装束姿は今も瞼に焼き付いております。その後、神社本庁時代のお仕事としては、黒神総長退任のあとをうけ、総長として現在の神社本庁庁舎建設の事業を完遂されました。また、昭和天皇崩御に際しては神社界として為すべき事柄を的確に指導されました。そして総長退任後は、神社本庁より長老の称号を受けられ、目まぐるしく変化する世界と日本の情勢のなかにおける神社界のあるべき姿についても教学顧問として指導を続けられました。

更には早くより世界平和の原点である宗教対話のために世界連邦日本宗教委員会の立ち上げに力を盡され、自ら代表委員として先頭となり推進されました。九十歳を迎えるに当たり、その立場を私にお譲り下さいました。その大きな目的実現の為に微力を捧げることが、先生の志を生かす道と誓うものであります。

第二は、本学校法人皇學館の運営と教育に対するご尽力です。

占領軍の神道指令による神宮皇學館大學の廃学は痛恨の極みでありましたが、神宮禰宜としての激務の中、大学再興期成会に参画し、母館への愛情と情熱とを以て再興の為に尽力された血の滲むような苦労話を伺ったことは、今でも私の脳裏から消えることはありません。倉田山に皇學の学び舎が再び建ち、その後、学校法人の評議員、常任理事、そして副理事長として当時の篠田康雄理事長を補佐し、学園の充実発展に大きく貢献されました。当初二学科のみで開学した大学が、四学科となり、大学院を設置し、また附属の高等学校、中学校を設けるに至ったのは、その成果の現れであります。

そして理事長に平成二年、就任されましたのち、当法人の健全化に努められ、わけても皇學館の存在意義はどこにあるか、建学の精神を明らかにし、現代社会における役割を果たし、具現化し、将来に伝えていくことに意を注がれました。その最も大きな決断は、名張市に本学としては画期的

常に多大なる御示唆を頂戴

神宮大宮司　北白川道久

櫻井勝之進大人命の御霊前に、謹んでお別れの言葉を申し上げます。

櫻井さんには、先頃より体調を崩され療養中であると伺っており、速やかなご快復を心からお祈り致しておりましたが、幽明その境を異にされてしまわれたことは、深い驚きと悲しみを禁ずることができません。

御令室様を始め御遺族、ご関係の皆様方のお嘆きは如何ばかりかと拝察申し上げ、謹んで哀悼の意を表し、心からご冥福をお祈り申し上げます。

櫻井さんは、神宮皇學館教諭、また教導司として昭和三十年、神宮にご着任になりました。昭和三十二年には神宮禰宜を拝命され、皇大御神へのご奉仕に専心されると共に、現在の部課長制を導入されるなど、時代に即した組織の改編を手掛けられ、神宮の奉護に日々心血を注がれました。

殊に、第六十回式年遷宮に関しましては、天皇親祭の御遷宮の本義を明確にするためご尽力頂き、マスメディア対策についても卓越した手腕を遺憾なく発揮され、総務部長のお立場において昭和四十八年の御聖業の完遂に絶大なる貢献をなさいました。

翌年、櫻井さんは神宮をご退職されましたが、その後も多賀大社・神社本庁・皇學館大学等において幅広く活躍されました。

この間、神宮に関するご著書も、ご在職中より近年に到るまで数多く、神宮学を興隆せしめたご功績も忘れることができません。

また、櫻井さんには神宮崇敬者総代・責任総代、更には参与・評議員に加え、遷宮基本問題検討委員会委員等をご委嘱申し上げ、枢機に参画頂きましたが、常に私共の進むべき方向について多大なる示唆を頂戴致しました。

ただいま神宮では、平成二十五年の御遷宮に向け鋭意準備を取り進めております。今後激変する社会情勢に伴い困難な諸状況も予想される中、櫻井さんの豊かな経験と卓越した識見により更なるお力添えを賜りますことを期待しておりましたが、それも今は適わず、洵に残念でなりません。

しかしながら、燃ゆるが如き情熱と一貫した信念のもと、皇室・神宮の奉護と、美わしい日本文化の継承に邁進されたそのお姿を深く脳裏に刻み、私共も神明奉仕に力の限りを尽くして参りたいと存じます。

茲に櫻井さんの多大なるご功労を讃えますと共に、御霊の安らかならんことをお祈り致しまして、お別れの言葉と致します。

崇高なる御精神を後世に引き継ぐ

神社本庁統理　久邇邦昭

今は亡き神社本庁顧問長老、多賀大社名誉宮司、学校法人皇學館常任顧問　櫻井勝之進大人命の御霊の御前に、謹んで追悼の辞を申上げます。

櫻井さんは、昭和八年、国幣小社津島神社に奉職し神職としての第一歩を印されてより、真清田神社、菊池神社、神宮、多賀大社に奉仕され、実に七十有余年の永きにわたって御神徳の宣揚と御社頭の隆盛に尽くされました。その歳月の長さと御偉業の数々には唯々驚嘆するばかりであり、改めて深甚なる敬意を表する次第であります。

また、神職としての務めを果たされる一方で、高邁な御見識から皇學館大学や芦屋大学の教壇にも立たれ、特に皇學館大学では副理事長、理事長として学校運営にも携はられました。創設以来百二十有余年の歴史の中で、一貫して神道精神を継承してきた皇學館大学が今日のやうな発展を見ましたことは、偏に櫻井さんの御功績によるものと言っても過言ではないと思ひます。

神社本庁に関しては、昭和二十八年から講師、翌二十九年からは評議員として、早くから本庁の運営と後進の育成に御協力を戴いて参りました。昭和五十八年四月には滋賀県内の衆望を担って神社庁長に選任され、同年六月には神社本庁副総長に就任、昭和六十二年には時の黒神総長の急逝によって神社本庁総長に推されたのであります。

神社本庁は当時、新庁舎の建設とともに組織機構の見直しといふ大事業に取り組んでゐた時期であり、続く御代替りといふ極めて重要な節目に会した時でもありました。平成十八年の新春を迎へ、庁舎とともに、本庁事務所の機構も今日までほぼ変はることなく継承されてゐることを思ひますと、往時の櫻井さんのお姿が偲ばれてなりません。

このやうな多岐にわたる御活躍が認められて、平成二年には神職として最高の栄誉である長老の称号が授与され、平成七年には勲三等瑞宝章を受章されました。

晩年は、神社本庁の顧問長老として、時局を見据ゑた御意見を折々に寄せられ、また、昨年末には私の喜寿のお祝ひにと「もろともに　祝ぐや初雪　かむる富士」との御歌を頂戴したばかりであります。まだまだお元気で御指導戴けるものと思ってをりましただけに、ここに永遠のお別れを申上げなければならなくなりましたことは誠に残念であり、痛惜に堪へません。常に自問自答を繰返され、率先垂範して来られた櫻井さんの崇高なる御精神は必ずや後世に引き継がれ、その御芳名は永く語り継がれてゆくものと存じます。

思ひは尽きませんが、茲に櫻井さんの御遺徳を偲びつつ、御霊の安かならむことを心からお祈り申し上げて、追悼の辞と致します。

神社本庁は当時、新庁舎の建設とともに組織機構の見直しといふ大事業に取り組んでゐた時期であり、続く御代替りといふ極めて重要な節目に会した時でもありました。平成十八年の新春を迎へ、庁舎とともに、本庁事務所の機構も今日までほぼ変はることなく継承されてゐることを思ひますと、往時の櫻井さんのお姿が偲ばれてなりません。

このやうな多岐にわたる御活躍が認められて、平成二年には神職として最高の栄誉である長老の称号が授与され、平成七年には勲三等瑞宝章を受章されました。

晩年は、神社本庁の顧問長老として、時局を見据ゑた御意見を折々に寄せられ、また、昨年末には私の喜寿のお祝ひにと「もろともに　祝ぐや初雪　かむる富士」との御歌を頂戴したばかりであります。まだまだお元気で御指導戴けるものと思ってをりましただけに、ここに永遠のお別れを申上げなければならなくなりましたことは誠に残念であり、痛惜に堪へません。常に自問自答を繰返され、率先垂範して来られた櫻井さんの崇高なる御精神は必ずや後世に引き継がれ、その御芳名は永く語り継がれてゆくものと存じます。

思ひは尽きませんが、茲に櫻井さんの御遺徳を偲びつつ、御霊の安かならむことを心からお祈り申し上げて、追悼の辞と致します。

【追悼】櫻井勝之進常任顧問を偲ぶ

皇學館大学の再興そして理事長として

名張学舎竣工式における御挨拶。

櫻井常任顧問が皇學館大学の発展に尽力された諸業績のなかで特筆すべきは、大学再興時の設立準備委員としての活動と理事長就任後の新学部創設である。

昭和二十一年三月三十一日「神宮皇學館大學官制」廃止の勅令が交付され、皇學館設置以来の六十四年に及ぶ歴史を閉じることとなった。しかしながら、館友を中心とする熱い思いが結実し、昭和三十七年に大学は再興される運びとなった。この大学中絶期間は、占領下という厳しい社会情勢のなかで、皇學館の伝統をいかに継承するかという重要な課題を抱える時期でもあった。昭和二十六年に一つの方向性が示されるようになる。それは、本学の学風継承として、まず日本文化研究所の設置を目指し、そして大学再建へとつなげる構想で、その原案は原田敏明元神宮皇學館教授と当時熊本の菊池神社宮司であった櫻井顧問により作成されるところとなった。その案は日の目を見るに至らなかったが、少壮の館友である氏に寄せられた期待の程が知られるところである。

伝統の学風継承

名張学舎竣工式祝賀会で富永英輔名張市長と。

神宮皇學館再興は昭和三十年四月、神宮経営になる神職養成機関としての「神宮皇學館」（昭和四十三年迄、四十四年より「神宮研修所」）の発足という形で具現化されるが、この年、櫻井顧問は宮川宗徳伊勢神宮奉賛会理事長と平田貫一近江神宮宮司（再興後初代学長）の懇請を受けて、伊勢の神宮へ赴任、教導司として生徒の養成にあたられた。こうしたなか、三十四年七月、財団法人神宮皇學館後援会が会長を吉田茂元首相として設立され、大学再興に向けての動きが本格化するところとなった。

再興大学の開学に向けて

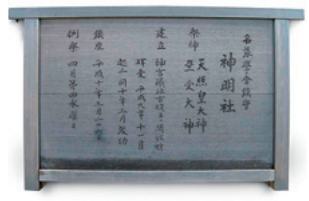
後援会設立趣意書に、開学当初は「文学部又は法文学部」の一学部に「社会学、経営学科」「国文学、史学科」の二学科を置くと構想され、実現に向けて三十五年に設立準備委員会の正式発足をみるが、委員長高原美忠八坂神社宮司のもと、櫻井顧問は委員の一人として、卒業生の意向を実現すべく、多忙極める準備作業上の折衝や調整に当たられた。就任教職員の問題や認可申請に伴う諸懸案事項などの解決は、実務担当としての明晰な判断をもって手腕を発揮される櫻井顧問の双肩にかかるところでもあった。建設途中の校舎、財政基盤の確立の要などを理由とする設置認可の保留、現地視察への対応など心の休まるところがなかったとは、後年ご本人も縷々話されるところであった。そして開学認可も見通しがついたなかでその準備や学生募集の事務に、林栄治理事とともに粉骨砕身された。これらのことについて、皇學館大学再興へ寄せられた吉田茂氏の期待の綴られた書簡を大切に保管されていたこともうなずける。

昭和三十七年に開学された皇學館大学は、文学部の国文・国史二学科としてスタートを切るが、設置認可がなされた直後の五十鈴会役員会での経過説明の中で、櫻井顧問は三重県側の意向として、大学への積極支援と共に、その将来に「社会福祉学科等の設置、附属高校等の問題」（『館友』臨時特集号、昭和三七年四月、一〇頁）への配慮など、綜合大学への発展とともに中等教育を担う期待が、再建皇學館に寄せられたと報告を行われている。高校は昭和三十八年に設置されるが、さらなる課題である社会福祉領域の人材育成はその後、顧り見られるところはなく過ぎた。

そのことが具現化されたのは、再興後三十余年を経た平成十年四月、櫻井顧問が理事長として「最後のご奉仕」にあたられた社会福祉学部の創設であった。

理事長就任

平成二年、篠田康雄氏の後を受けて理事長に就任された櫻井顧問は、五カ年を目途とし、学校法人皇學館大學教学振興会を設立して募金活動を開始されることとなった。その趣旨は、教育内容の充実と諸施設の拡充整備等を図る上で、本学園を長く支えて下さる幅広い支持者の獲得と新卒館友の母館への期待を受け止めるところにあった。振興会活動は学部新設のために一時期休止をされるが、外部の将来にわたる支援を図られた趣旨は、教員が学生教育と研究活動に専念する上で、経営問題は理事側の責任として、役割の明確化を目指されたところにある。入学時の告辞では、保護者に向けて常に「本学では先生方がしっかり教育にあたって下さいますから、どうか安心してお任せ下さい」と述べられ、教学への信頼を置かれる立場は一貫されていた。



名張学舎　神明社由緒書

櫻井顧問は、学者神主として学界でも高く評価されているが、本学での自己点検・評価の制度を確立されたことも重要である。大学では平成三年の文部省による大学設置基準大綱化をうけて、将来構想やカリキュラムの改正など検討され、西宮一民学長のもとで自己点検の実施が図られていた。櫻井顧問はこの課題の重要性に鑑み、自己点検・評価を法人全体に及ぶ制度として位置づける考えを示され、自らも大学基準協会のセミナーへ参加し、その結果を「出張報告書」にまとめ会議に示すなど積極的に推進された。こうした取組みが西宮学長のもとで教員の研究業績公開へと展開されたことは知られるところである。

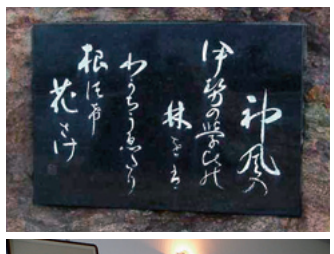
新たな人材育成を目指して

一方、日本の大学は少子化による厳しい社会状況を迎え、大学全入時代へと突入することは必至との認識のもと、一地方の単科大学としての本学の将来はいかにあるべきかを問われ、その決断を下されたのが、新学部の設置という新たな拡充展開であった。その具体化が名張市の要請、三重県の支援、そして本学の意向との結び合った公私協力方式による社会福祉学部の設立であった。この方針を決められてからは、自らの役割を募財担当と自覚して、八十五歳からの全国行脚が始められた。行動を共にした職員の労を感謝して「新しき学部設けむと勧進の旅重ねけり北に南に」との和歌を詠まれているが、神社界の協力七億二千万円、名張市・三重県二十八億円、法人資金十二億三千万円が投じられるところとなった。

社会福祉学部の設置について櫻井顧問は小平桂子アネット氏との対談で、日本の伝統社会で脈脈として培われ、「人情」に裏打ちされ、実体として機能してきた温かみのある福祉、共生の倫理を「もう一度、現代社会に自覚的に生かしていく必要」がある（『週刊朝日』一九九八年新春特別号）と述べておられるが、本学存在の今日的意義について地域社会と福祉をキーワードに、学園が再興後十分には為し得なかった新たな領域への人材育成を目指されたといえよう。

新学部開設時の歌「神風の伊勢の学びの林をば わかちうゑたり根つけ花さけ」は、皇學館が創建されて以来築かれてきた学風の継承と新たな世紀に向けての展開の思いを託されたものである。

また、学問の神として仰がれる菅原道真公の詩の一節「茫々タリ恩徳ノ海」（菅家後草）を流麗な筆に認め、学園に残されている。広大無辺の恩徳、皇學館へ寄せられた多くの方々の恩頼を忘れないようにとの遺言と受け止められよう。



(上)名張学舎　歌碑
(下)本学園にゆかりの揮毫類

櫻井勝之進大人命　御略歴

明治42年10月28日	島根県那賀郡今福村大字久佐（現・浜田市）村社八幡宮社掌　櫻井勝茂・ヌイの長男として出生
昭和６年３月	神宮皇學館本科第一部卒業
昭和８年２月	国幣小社津島神社奉職、同主典（10年）
昭和13年１月	国幣中社真清田神社主典
昭和14年11月	官幣大社多賀神社主典・禰宜（19年）
昭和20年10月	別格官幣社菊池神社宮司
昭和30年６月	神宮皇學館教諭兼教化局教導司
昭和32年３月	神宮禰宜
昭和48年10月	第60回神宮式年遷宮遷御の儀に奉仕
昭和49年６月	神宮司庁教学研究室長
昭和50年１月	芦屋大学教授（平成７年３月退任）
昭和53年８月	学校法人皇學館大学常任理事
昭和54年８月	多賀大社宮司
昭和58年４月	滋賀県神社庁長
昭和58年８月	皇學館館友会会長（平成２年退任）
昭和62年５月	神社本庁総長
平成元年７月	滋賀県神社庁名誉庁長
平成２年２月	神社本庁「長老」の称号を受く
平成２年３月	学術博士（芦屋大学）取得、多賀大社名誉宮司の称号を受く
平成２年８月	学校法人皇學館大学理事長（平成10年８月退任）
平成７年11月	勲三等に叙し瑞宝章を授与せらる
平成10年９月	学校法人皇學館大学常任顧問
平成17年12月25日	享年96歳を以って帰幽

【主要著書】『伊勢の神宮』『伊勢神宮』『伊勢の大神の宮』『カミ・くに・人』『神主の信と学』『聖恩は雨の如くに』『柏葉』『日本神道論』『伊勢神宮の祖型と展開』『続カミ・くに・人』『式年遷宮の理由』『神道研究ノート』『次代に伝える神道』『神道を学びなおす』